

自閉症の発症は生得性か後天性か？

2009

川崎医科大学名誉教授/Kids21 子育て研究所所長
片岡 直樹

自閉症とは、長い人生の旅のごとく初期に発生する発達障害の得意なタイプであると考えられる。それは、未完成な、またそれだけに膨大な発達を遂げる幼い脳に起きた小さな出来事の結果である。最初は小さな異変であったものが、後に大きな建築的に重大な欠陥を生じたものと考えられる。自閉症児がこの世に生をうけてまもなく、この異変による傷跡をそのあどけない表情の下に読み取ることはできない。否、むしろきれだって端正な容姿の持ち主であることが多い。自閉症児に初めて会う人に神秘的な印象を与える理由でもある。

自閉症児は、私たち定型発達者（健常者）と異なる資質をもって、この世に生まれてきたのではない。本来同じ人間として生をうけた仲間の中の幾人かが思いがけず微小であるが、結果の重大な障害を受け、孤独な旅に出ることになったと考えられる。自閉症児が見せる融通のきかなさ、混乱したときにみせるパニックは、健常者にもその面影を認めることができる。それらの行動は、特定の条件に限っていえば、私たちの生存に欠かせないものでさえある。私たちは発達の分岐点において、かろうじて「正常」な方への道を選ぶことができただけである。

ヒトという人間としての旅の始まりは、私たち1人1人が物心つくよりずっと以前のことである。それは、多くの危険をはらんだ旅立ちでもあった。私たちはこの未明の嵐のことを忘れ、その後の静かな光景だけを見ながら人生という旅を続けている。しかし、自閉症者は、この時の嵐の厳しさとその傷跡を克服することの困難さを、身をもって私たちに警告していると考えられる。自閉症とは、その名前から一風変わった人たちの様子を示す症状としてだけ受けとられがちである。そうではなく、1人の人間のすべての構造が根こそぎ揺れ動かされた結果を示す症状である。だから、そこから生まれる問題は、治療や教育の問題であるばかりではなく、脳と「こころ」の全般的な問題であり、言語や認識や行動や感情の問題であり、哲学の問題でさえある。そんな広い世界についての問題提起をかれらはおこなっている。ともかく今、自閉症という障害は多くの人に知られるものとなり、私たちとかれらの間のより良い係わりのあり方が討論されるようになった。分岐した道は長い旅の後で、再び近づいてきたのである。今こそ、お互いの道筋を振り返り、私たち人間の、これからの旅の目安にしたいものだと思う。